

## 黒川山甲斐金山遺跡遡行報告

【山行日】5月5日～6日      【メンバー】CL 辻本 橋本

【行程】 5日・・・三条新橋～黒川谷遡行～黒川山金山遺跡（泊）

6日・・・野営地～金山遺跡循環道～登山道～三条新橋～帰葉

昨年、橋本氏と二人で竜喰谷の精錬場と呼ばれる付近から、尾根を上がり大常木林道を歩いた。このルートを調べるうちに秩父縦走路の笠取山～大常木山南麓に牛王院平、将監峠、一ノ瀬、二ノ瀬、おいらん淵、竜喰谷、精錬場など気になる地名が多々あった。これらは全て戦国時代の武田家金山にまつわる地名だ。そして丹波川を挟む黒川山東面 1,300 付近に武田家最大の金山跡がある。そこには千人軒と呼ばれる集落跡も残っているらしい。ここで焚火をしようと二人が合意。GW の一夜を過ごすことになった。

5日午前4時過ぎ千葉を出発。市川から三郷に抜け、外環～関越道～圏央道を走り青梅まで高速代々 ¥1,350 の割安ルートを取る。

青梅街道の路面は、早朝の降雨で鴨沢付近から、所々水が流れている。これから遡行する谷の増水が頭をよぎる。7時過ぎに三条新橋に着き、沢支度、釣り支度を済ませ、今宵の嗜好品をザックに詰め込み、バスが走ったという旧青梅街道の廃道に行く。新緑が美しく映え、眼下の丹波川がゴウーゴウーと音を立て、白く流れる。道はバスが1台どうにか通過できそうだが、随所に崩落した岩が道を塞ぐ。800m付近の黒川谷出合は、バスが回転出来るようなスペースがあり、7～8m上に崩落した橋の一部が見える。

沢はやはり増水していた。出合い上には8mの滝が豪快に水を落としていた。左から巻き、沢に下り、左岸登山道に上がる。「おいおい、黒川谷は沢屋に相手もされないショボイ沢と違ったのか！」増水して迫力満点に流れる沢に怖気づく。水線通しにはなかなか行かせてくれない。沽券に関わると5mの滝は水線際を登った。岩は秩父特有の苔とヌメリで黒光りを放つ。

二つ目の堰堤を越えてから、イワナの骨酒呑みたさに竿を出す、まったく反応なし。激流にはなかなかイワナが隠れそうな淵がない。やっと小さな淵を見つけ餌を流すが、流木に引っ掛ける。その時、ゆらっと黒い魚体が出た！逸る心を抑え仕掛けを付け替え、再び、餌を入れると、ググッとした手ごたえ。23cmくらいのイワナが上がった。その後、同様サイズをもう1匹釣り上げたが、それっきり。相棒はボウズ。

この沢は蛇行がない。ゴルジュもなく、真っ直ぐに落ちてくる。堰堤下には滝があり、変化に富んだ溪相だが、上は急なゴーロばかりで、釣り師も堰堤下までしか来ないのだろう。でも水が引けば穴場かも知れない。

右に10m程の滑滝が見えると三俣になり、地形図にある1157mに着く。右から登山道も下りている。左の沢には大岩があり、その左岸道を登って行くと、苔むした中に屋敷跡と見受けられる整地された箇所が、至る所に現れる。黒川金山の千軒集落跡だ。

1280m付近にテントを張り、早速、焚き火の準備。周りには大木の切残しや枯れ枝、枯れ芝など燃やす材料は豊富。焚き火も早々に盛んになり、まずはビールで乾杯！時間は午後2時。日はまだまだ降り注いでいる。

ワラビ、漬物、乾き物、メインの春飛びのクサヤ2匹、ベーコン、チーズなど副菜も豊富。だけどアルコールは酒1カップ：2本。ビール700ml：2本+350ml：2本、ウイスキー：500mlだけ。口ほどにもない呑んべが二人。もう少し若ければ1升瓶を担いでいたろうに。

春飛びのクサヤでチビチビと酒を飲む。「う～ん、美味しい！クサヤは春飛びだね。最高！」

1カップを熱燗にし、焼きあがったイワナで骨酒を楽しむ。「若い奴に焚き火の面白さを教えてやりたい。壁登りとか、ハイキングとか、軟弱な奴ばかり！山でもっと遊ばにやー」「そうだ、そうだ！」出るのは不良オヤジの愚痴ばかり。それでも至福の時は過ぎていく。

疲れて5時前にはテントで横になり、小用のために這い出した10時頃、「ひゅるるうー、ひゅるるうー」と、どこことなく哀れで、不気味な声が聞こえてくる。殺された遊女の声か・・・？ だんだんと二人の目が冴えてくる。その声が何時までも続くので「鳥だよ、鶴だよ。鶴の鳴く夜は恐ろしい～」と寝袋に頭まで潜り込む。(鶴=ヌエ/トラツグミという鳥)

午前4時、どんよりと明るくなり、活動開始。1.5合の米を分け合い、レトルトカレーで朝食を済ませ、荷物をテントに掘り込んだまま、いよいよ金山探検に向かう。

黒川金山循環歩道は所々、踏み跡程度になるが、標高1400m辺りまで雛壇に整地された千軒集落跡が広がる。工夫や役人、遊女の嬌声、馬の嘶きなど、今にも蘇ってきそう。間歩(まぶ=坑道)には残念ながら入れなかった。入口付近の岩が崩れ、県が造った鉄製の柵も押し潰されている。間歩を覗いて見るが、今にも岩が落ち埋まってしまいそう。とても危険で入れない。写真を撮っただけで循環を続ける。ほぼ循環を終えようとした頃、橋本氏が財布を落したと顔色を変えた。ウエストポーチがぱっくりと開いたまま。ただちに道を引き返し、「現代の金」の捜索が始まる。間歩入口まで登り返し、沢を渡り、忠実に歩いたコースを辿る。「あった！」野営地近くで、金色ではなくコバルトブルーの「現代の金」は発見された。

焚き火跡を処理し、飲み水を確保し、テントの撤収となる。千軒集落を名残惜しそうに観察しながら、ゆっくり登山道を下り、2時間余りで三条新橋に下山した。

辻本：記



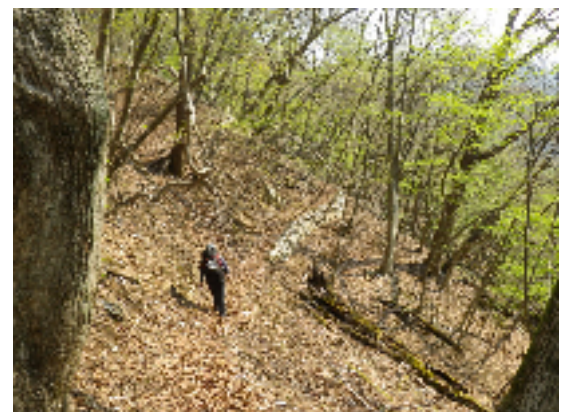
整地された遺跡



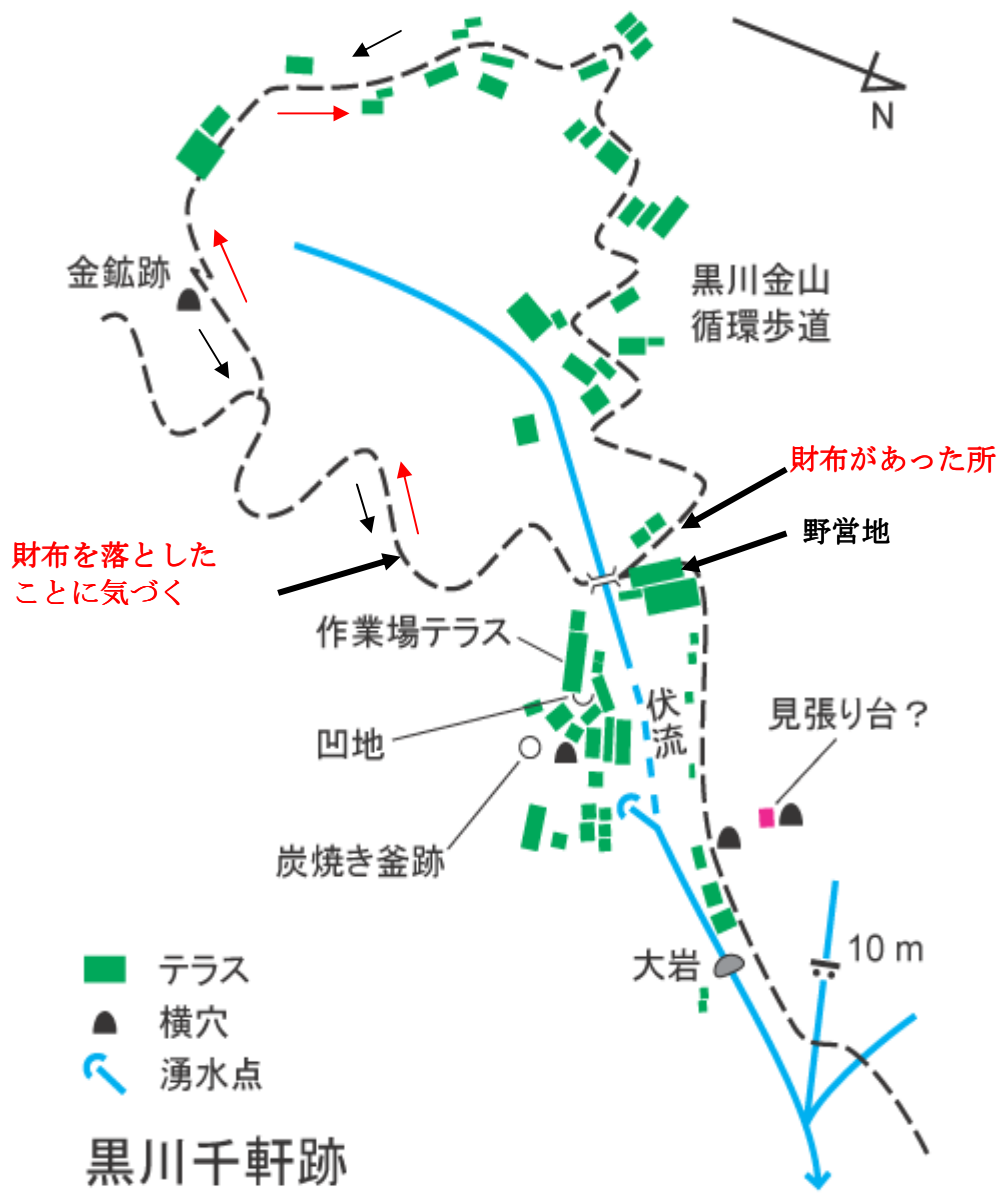
住居跡の石組み



崩壊した金鉱入口



新緑の登山道を下る



### 黒川千軒跡